

奥の細道むすびの地「大垣」 十六万市民投句

一般の部

令和五年七月度 入賞句一覧 投句数 五百十四句

特選



名和 永山 選

白南風や美濃の翠巒映す河 大垣市 竹中 美穂子

美濃の国は山と川に囲まれた、自然の美しいところである。「翠巒」とは緑色の連山である。その緑が川に映されている。季語「白南風」が、その美しさを際立たせている。俳句の基本形である、上五の季語と切れ字「や」に対して、下五が名詞であることで、実に落ち着いた句になっている。

極楽の余り風吹く夏座敷 兵庫県西宮市 小西 寒心

「極楽の余り風」は聞き慣れない言葉であるが、気持ちの良い涼風のことである。「極楽の西風」ともいう。お浄土は西にあると言われ、そこから西風を意味する。プレバトの夏井先生なら「風は吹くもの」で「吹くがもつたいない」と言われそうだが、夏座敷へ吹いてきたその実感がこもっている。

「LINEして」発車ベル鳴る天の川 安八郡輪之内町 大橋 徹

季語「天の川」の彦星と織り姫を上手く表現している。働き者の二人が恋をして結婚した途端に、働かなくなってしまう。天帝は、天の川をはさんで別々に暮らせと。一生懸命働いたら、年に一度逢わせてやると。今年の二人は逢えたのだろうか。逢って別れる際の「LINEして」が、彦星と織り姫の心を表しているのである。従来言われてきた「花鳥諷詠」の句から、新たなチャレンジを試みた句であるともいえよう。

秀逸

山伏の懐に入る瀧の音 養老郡養老町 佐藤 咲楽

語ひの隙間にくゆる蚊遣香 不破郡垂井町 石井 直実

門辺へと旅の名残りの夏の蝶 大垣市 田中 雅子

時の日やトラック夜を急ぎ去る 大垣市 吉田 てるみ

聞き流すことも愛なり心太 兵庫県加古川市 戸田 みつよ

赤薔薇や嫌いな人は嫌いな 大垣市 柴田 えり子

寝ころべば薫風の空われのもの 大垣市 村瀬 佐智子

風立ちて空を掃きをり今年竹 岐阜市 辻 雅宏

薔薇垣や隔てなじまぬ人もゐて 愛媛県松山市 平野 ヒサエ

柿の花波風立てぬやうに生き 岐阜市 堀江 美州

入選

風に揺る花に戯る夏の蝶

大垣市

江崎 千鶴子

夏椿きのふの花といふあはれ

岐阜市

関谷 恭子

川湊首夏に名残りの投句箱

岐阜市

金森 柳絮

色褪せし売家看板大西日

養老郡養老町

田中 紫香

ペディキュアの赤を投げ出す夕端居

東京都新宿区

花澤 ちいこ

父の日や福耳にして一徹な

埼玉県川口市

吉永 寿美子

静寂の入相時や合歓の花

大垣市

立川 昌子

棚田満つ地球の微熱少し下げ

大垣市

井沢 美志津

よはひには優しい風の扇風機

大垣市

尾関 逸子

建て売りの旗色褪せて半夏生

東京都狛江市

椎野 一恵

血糖値一喜一憂梅雨の朝

大垣市

傍島 隆

楚々として謎めく白や半夏生

本巢市

山田 香山

百選の水湧く里や初螢

三重県四日市市

後藤 允孝

荒梅雨や始業のチャイムまだ鳴らず

養老郡養老町

松永 智志

夏座敷開け放たれて峡の風

大垣市

森 茂寿

桐下駄の柁目の清し夏祭

大阪府東大阪市

森 佳月

本題を切り出しかねて新茶汲む

大垣市

村瀬 利明

臥す母の愚痴に頷く団扇かな

兵庫県豊岡市

辻井 一路

鉄塔の幾何学模様夏の影

本巢市

土川 みどり

ビニール傘の海月行き交う梅雨の街

埼玉県さいたま市

澤田 短夜の月

一般の部

選者吟

芸を終ふ海豚の帰る大西日

永 山

